

どうして、こんな話になっちゃったんだろう。

彼との約束が、そもそもの始まりだったんだ。

彼の部屋で、二人でサッカーの試合の中継を観ていて、どっちが勝つか、賭けをしたのだ。

同じリーグの中でも、優勝争いをするような上位のチームと、彼が鼻屑にしている、彼の出身地の弱小チームの試合。

ゲームの流れでも、強豪チームの方が圧倒的に攻撃を仕掛け、弱小チームは守戦一方だった。

それでも彼は、鼻屑のチームの応援を続けている。

ちよつとした意地悪な気持ちがあったのだ。

「ねえ、この試合、どっちのチームが勝つと思う。」

どう考えても、普通なら強豪チームと言うだろう。

それでも彼は、もう一方のチームの名を挙げた。

「そうかな。どう考えても相手の方が強そうだよ。」

「サッカーなんて一点とか二点の勝負だから、判らないよ。」

「じゃあ、賭けをしようか。」

先日、彼のお出かけ先を相談していて、Tホテルのケーキバイキングの話をしたら、却下されたのを思い出した。

「負けた方が、勝った方の願いをひとつ聞く、なんていうのはどう。」

「いいよ。どんなことでも良いのかい。」

「もちろん。なんでも良いわよ。」

「何を狙ってるんだい。」

「私ねえ、Tホテルのケーキバイキングに連れて行って欲しいの。もちろん、あなたの奢りでね。」

「で、僕が勝つたら。」

「なんでもいう事きいてあげるわよ。」

その時は、彼がこんなことをするなんて、想像もしていなかった。

もう体の関係は、日常のことになっているから、今さらセックスしようとも、あえて言わないだろうし、せいぜいが、私の奢りでご飯を食べに行くくらいだろうと、思ってたんだ。

「ほんとに何でも。エッチな事でも良いのかな。」

「良いわよ。一度だけね。エッチな事でも何でも。」

そんな約束の後、試合は劇的な終わりを迎えた。

もう数分で、試合は引き分けで終了するという時に、彼の押すチームの選手が倒され、PKになってしまった。倒された選手がゴールを決め、そのまま試合は1-0で終わった。

「ああ、惜しかったな。ケーキバイキング、行きたかったのに。」

「残念だったね。まあ、サッカーの試合なんてそんなこともあるさ。」

「それより、あなたの望みは何なの。」

「どうしようかな。次の時までを考えておくよ。」

その晩は、一緒にご飯を食べて、普通に過ごしたのだが、彼が何を求めてくるか、ちよつと気になっていた。

エッチな事でも良いかなんて、わざわざ念を押したのだから、何か、そういう事を考えているのだろうか。

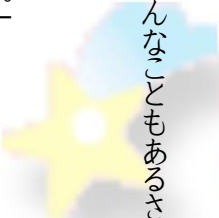
もう何度も普通のセックスはしているのだから、縄で縛りたいとか言い出すのかな。

まあ、一度くらいは、そんなことを彼にさせてあげても良いかもしれない。

彼がそれで、特別な満足感を得るのなら、ちよつとくらいは、させてあげるのも良いし、私自身がどう感じるかも

<https://www.spacegiga.com/>

SPACE 銀河



ちよつと興味がある。

そんなことをぼんやりと想像していたのだ。

そして、その日がやってきた。

彼とのセックスは、あまり自室ではしない。

隣の住人にバレそうで、なんだか恥ずかしいし、部屋の生活感がある中で体を重ねるよりは、スペシャル感を出したいのだ。

いつものように二人でラブホの一室に落ち着くと、彼はこんなことを言い出した。

「ねえ、本当に願い事を聞いてくれるんだね。」

「もちろん良いわよ。女に二言は無い。

でも、あんまりひどい事しないでね。

縛ったりとか鞭で打ったりとか。」

実際には、ちよつと縛られるくらいは良いかな、とは思っていた。

本格的になれば、肌が赤くなって血が出るほど打ったり、天井から吊るしたりするらしいが、彼もそこまでではないだろう。

「そんなことはしないよ。でも、ちよつと恥ずかしいかな。」

「なにをするつもりなの。」

「モード写真の撮影会ではどう。」

「AVみたいに、あそこを。バックリ開いて顔も一緒に写すなんて、一生の記念になるよ。」

そんなことは思っても居なかったが、それは恥ずかしい。

それに、撮った画像のデータは、PCに保存されるのだろうか。



もしも、ウイルスとかに侵入されて、データ流出なんてことになったら、一生、その画像が世間に出回ることになってしまう。

PCが古くなれば、買い換えるだろうし、データを消したつもりでも、復元させる方法もあると聞いたことがある。

「ええ、あそこの写真を撮るの。その画像はどうするのよ。もしもデータ流出なんて起こったら、一生世間に残っちゃうのよ。」

「じゃあ、撮影は無しで、お医者さんごっこかな。」

お医者さんごっこってことは、当然服を脱いで、いろんな処を診察されるってことだろう。

おっぱいとかおまんことか、彼の狙いは想像できる。

それだつて充分恥ずかしいが、撮影されて画像を残されるよりはました。

私は同意して頷く。

「うん。それならまあ、良いかな。」

「じゃあ、今日はホテルを出るまでは、僕が医師で、君が患者だよ。」

「はいはい、ドクター。」

「きちんと訊かれたことには正直に答えて、言われたことには、素直に従うんだよ。」

言いくいことでも、恥ずかしい事でもね。

では、これから診察を始めます。」

彼はそういうと、手にしたバッグから、何かを取り出した。

聴診器とペンライトだ。

まさか、そんなものを用意していたなんて、ちつとも気づかなかつた。

私は、恥ずかしさをぐまかすようにおどける。

「なんだ、最初からそういう小道具も用意してたのね。」

「カメラも用意してあるんだけどね。」

「ヌード撮影か、お医者さんごっこか、どちらかがやりたかったのね。」

「そう、この前、『灯りを消して』って言ったじゃないか。」

「明るいところで、君の体をじっくり観てみたいと思つてね。」

確かに、ヌード撮影にしても、医師の診察にしても、薄暗がりでは無理だろう。明るい灯りで照らされて、体を観られるのだ。

「いやね、そんなこと。恥ずかしい。」

「そうやって恥ずかしがる姿も可愛いよ。」

今日はもつと恥ずかしいこと、してあげる。」

そうやって診察は始まった。

最初は、目蓋を引つ張つて眼を診察したり、口を開けさせて、ライトで照らして喉を診たりしていたが、それは、お医者さんのふりだけだろう。

彼の本当の目的は、服に隠れた部分だろう。

「では、次は内科の診察です。ブラウスとスカートを脱いでください。」

私は、その言葉に素直に従う。

下着まで脱がなきゃいけないかと思つていたけど、少しづつ裸にしていくつもりなのだろう。

「腕を上げて、腋のリンパ腺を観ます。」

そう言つて、腋の下を観られた。

微妙な恥ずかしさが湧きおこる。

「きれいにムダ毛処理してますね。」

「衛生的にしているようで、香りも良いですね。」

普段、あまり気にもしてないけど、改めてそんな事言われると、きちんとしておいて良かったと、安心する。

<https://www.spaceinga.com/>
SPACE 銀河

「では、次は胸の聴診です。ブラジャーを外しますね」

やっぱり、次はそこだよな。

もう、覚悟はしていたけど、改めて、明るい光の下で、おっぱいを観られるのは照れる。

反射的に手が動いて、胸を隠そうとしてしまうが、彼の手で制止された。

内科の診察で、聴診器を当てられた経験はあるが、彼は本当の医師ではないから、手つきも触れる部分も違っている。

おっぱいを丁寧に撫でまわすように聴診器を当て、特に乳首はしっかりと触ってくる。

聴診器の冷たさが、乳首を刺激し、おもわず体がヒクツツてしてしまう。

「おや、乳首がちよと大きくなりましたね。」

こうやって弄られれば、乳首が勃起するのは当たり前じゃない。

そのつもりで、じっくり触っているんでしよう。

そう思っても口には出せない。

やっぱり、自分の体が反応してしまうのは恥ずかしい。

彼は聴診器を置き、乳首を親指と人差指でつまむようにして、もつと弄り回す。

これじゃ、お医者さんごっこじゃなくて、普通のセックスプレイだ。

「そんなことされたら感じちやう。」

思わず、そんな言葉が口から出る。

「まだ診察の途中ですからね。」

胸だけで感じさせて終わりではないだろう。その先が有るはずだ。

「次は腹部を診察しますから、そこに横になってください。」

私は素直に、ベッドに横たわる。

おっぱいはさんざん観られて弄られているから、今さら隠さないで、腕は体の横に置く。



彼は、聴診器を臍の周りに当てている。

そんな処の音を聴くなんて、お医者さんでもされた事は無い。

お腹の鳴る音が聴こえるのだろうか。

そんなのも、何かの診察になるんだろうか。

「腸の動く音が小さく聞こえますよ。お腹の調子はどうですか。」

そんなことを訊かれても、なんて答えれば良いのか戸惑ってしまふ。

「まあ、困らないくらいには…」

などと曖昧に胡麻化すと、

「ちよつとお通じが、途切れがちなのかな。」

と、重ねて訊かれる。

「まあ、時々、数日無いこともあります。」

お通じの話なんて、恥ずかしいな。

私がちよつと便秘気味なのは、彼は知らないはずだ。

こんな形でバレちゃうのも仕方ないかな。

「今日はどうですか。」

「昨日は少しだけ出たけど、今日はまだです。」

お医者さんごつこで、きちんと問診にも答えなきやならないから、本当の事を告げてしまふ。

彼は、しばらくお腹の部分を聴診器で撫でまわした後で、次の診察の宣言をする。

「では、次は婦人科の診察です。ショーツを下げますよ。」

やっぱりね。それがメインの目的地なんだ。

お医者さんごつこを始めた時から、それは解つてた。

彼に明るいところで、私のおまんこを覗かれてしまうのは、とつても恥ずかしいけど、考えてみれば、この先、子供が出来れば、見ず知らずの医師に、同じようにおまんこを診せなきやならないんだから、セックスをする相手に

見せるくらい、慣れなきやいけないよね。

彼はお尻の部分に手を回し、私は腰を浮かせ、するりとショーツが下げられる。
最後の一枚が足首から抜き取られる。

「じゃあ、膝を立てて、足を開いてください。」

当然、流れはそうなるよね。

でも、自分で脚を開いて、「さあどうぞ。おまんこ観てね。」
なんてするのは、さすがに恥ずかしい。

ちよつと躊躇つてしまう。

「ほんとに。こんな明るいところで、あそこを観るの。」

「そうだよ。僕はお医者さんなんだからね。」

明るいところで診察するんだよ。」

「でも…恥ずかしい。」

「医師の診察なんだから、恥ずかしいなんて言つてちやダメだよ。」

彼は、私の右膝を持ち上げ、私の右手を膝の裏側に回させる。

そうされてしまえば、抵抗して脚を伸ばすわけにもいかない。

お医者さんごっこをするついでという約束なんだからね。

もう片方、左脚も同じようにされてしまう。

これじゃ、赤ちゃんのおむつを替えるポーズだよ。

当然、おまんこもお尻の穴も、しつかり観えているんだろう。

彼も、こんな目の前で、実物のおまんこを観察するなんて、生まれて初めてなのだろう。

まあ、以前の彼女とこういう遊びをしたことがあるのかも、なんて考えが、ふと頭を駆け巡るが、私を観るのは初めてのはずだ。

彼も興奮しているのが、なんとなく感じ取れる。

声も上ずって、表情も硬くなり、何よりも、股間がもつこりと盛り上がっている。

普段なら、そのおおきくなつたおちんちんが、わたしのおまんこに入ってくるところだけど、今日はお医者さんごつこだから、指とかでいろんな悪戯をされるんだろうな。

クリトリスとか弄られたら、それだけで感じてしまいそうだ。

そういうのも一度くらいは良いかもしれない。

私は、彼の次の行動を待った。

彼は、私のあそこの周りに生えている毛をかき分け、おまんこのビラビラを払げる。

そんなにじっくり観られるととても恥ずかしいけど、なんだかその恥ずかしさが興奮に変わって、おまんこの中が濡れてきている気がする。

彼の指先がクリトリスに触れる。

その瞬間は、なんだか電気が走ったように感じてしまった。

だって、普段なら優しくあそこの毛に手を伸ばして、手探りでクリトリスを刺激するとか、おちんちんを入れたままで、クリトリスも弄るとか、もつと体全体へのタッチの一部としてクリトリスも弄られるのに、今日は眼で見えて、ちよつとおまんこの入り口のビラビラを引つ張つた程度で、いきなりピンポイントでクリトリスを直撃されちゃつたんだから。

その後も、彼は指先で突いたり、摘まんだりちよつとしつこいくらいにクリトリスを刺激する。

「この部分が陰核と呼ばれるところですね。

一番敏感な性感帯と言われています。

感じますか。」

そんなお医者さんみたいな専門用語で言われると、かえって恥ずかしさが増してしまう。

「は、はい。どうしても気持ち良いです。」

「人によっては、陰核の刺激よりも、膣に挿入される方が性感が高い人も居るということです。あなたは、どちらの方が感じやすいですか。」

「あ、あの、どちらも感じます。」

「じゃあ、実際に膣の中にも刺激を加えてみましょう。」

「いよいよおまんこの穴の中も責めてくれるのかな。」

彼のおちんちんを入れてくるんだろうか。

それとも、クリトリスと同じように指で弄りまわすのかな。

何をされるのか、期待と不安でドキドキしていると、彼はバッグの中からまた何かを取り出した。それはアヒルのくちばしのような形をしてる。

「これが何だか解りますか。」

それって、産婦人科のお医者さんが、おまんこの中を診る時に使う道具だよね。

一応、知識としては知っている。

「それを、使うの。」

「そうですよ。痛くはありませんからね。」

これを膣に挿入して、内部の様子を観察します。」

「そんな処まで観られちゃうのね。」

「診察ですからね。」

彼はあくまでも医師の診察を装って、冷静に診察を進めているふりをする。でも、声が震えているよ。

「では、膣鏡を入れますよ。」

そう言われて、その道具がおまんこの入り口に当てられ、ゆつくりと慎重に奥に押し込まれる。

「痛くはないですね。」

「はい、でもちよつと怖い。」

「大丈夫ですよ。これから膣鏡を抜げて、中の様子を観ますね。」

根元のねじを回してるようで、カリカリとする感触が体に微かに伝わってくる。

ピッタリと合わさっていた肉の壁が左右に広げられ、中まで空気が入ってくるのが解るようだ。

彼は、ペンライトを使って、私の体の奥の方まで照らし、じつくりと覗き込んでいる。

「子宮の入り口まで見えていますよ。」

こんな処まで観られている気分はどうですか。」

「いやだ、恥ずかしい。そんなところまで…」

「でも、しっかりと濡れていますね。恥ずかしいけど感じちやっているのかな。」

「だって…」

「じゃあ、こちらの方の感度も確かめてみましょう。」

彼は、バックリ開いたおまんこの中に指を這わせ、奥まであちこちを触りまくる。

観られてるだけでも変な感じなのに、他の部分に触れずにおまんこの中だけを刺激されるのは、恥ずかしさと快感のミックスで、変な声が出てしまつ。

子宮の入り口を触っているのが感じられて、ムズムズしてしまつ。

これが「子宮がうずく」つていうやつだろうか。

「やっぱり、膣の中でも感じるんですね。」

こちらとどっちの方が、快感が大きいですか。」

そんなことを言いながら、中に入れたのと反対の手で、クリトリスもつまむようにしてくるので、余計に感じてしまつ。

「やだ、そんなに両方責められたら逝っちゃう。」

「これを抜いて、あなたのモノを入れて欲しいの。」

やっぱり、こうなると、彼のおちんちんで中を満たして、気持ちよくさせて欲しくなってしまう。

彼は、私の願いを無視するように、今度は顔を近づけ、舌をクリトリスに伸ばす。

こうやって舐められたことも、何回かはあるけど、明るい照明の下で、おまんこをじっくりと眺められながら、クリトリスだけをピンポイントで舐められるなんて、背筋がゾクゾクしてしまふ。

彼は、まるで猫みたいに舌で舐め上げたり、唇で吸ったり、歯で軽く噛んでみたりと、私のクリトリスを責めると、次に舌をもうちよつと下の方に這わせる。

「こちらは、婦人科じゃなくて泌尿器科の担当分野ですね。」

おしこの出てくる穴ですよ。」

そんなとこ、舐めたら汚いんじゃない。

いくら綺麗に洗ってあつても、おしこの出る穴やうんちの出る穴は、汚いような気がする。

それが、私のもね。

「そんなとこ、舐めないで。」

さいわい、このホテルに入る前に行ったレストランのトイレで、ビデとウォシュレットを使って綺麗にしてある。

でも、まさかこんなことになるとは思ってなかつたけどね。

「じゃあ、こちらの方が良いのかな。」

そんなことを言われて、クリトリスやおまんこの入り口を舐められ続けて、もう逝きそうってくらい感じさせられてしまふ。

「お願い。舐めるだけじゃなくて、アレを入れて。」

「そんなに感度がアップしてるんですね。」

それでは、別のセンサーを入れて、膣の締付強度の確認をしてみましよう。」

センサー？ おちんちんを入れてくれるんじゃないの。

次は何をされるんだろう。一瞬不安になってしまふ。

でも、彼が取り出したセンサーっていうのは、彼の股間に付いていて、とっても大きくなってしまっている肉の棒のこどだった。

「膣鏡を抜いて、このセンサーを挿入します。」

これで、締付強度を測定しますね。しつかり力を入れてみてください。」

私は待ちきれずに、自分から彼のおちんちんをおまんこに受け入れ、腰を動かし始める。

ここまで、いろんな悪戯されて責められたのだから、もう、自分の快感だけに夢中になってしまつて、彼の反応なんて気にしてる余裕は無い。

やっぱり、こつやつて入れてもらうのが、一番落ち着くし、気持ち良いな、なんて思いながら、自分だけが達してしまつた。

まだ彼のおちんちんは、硬いままだけど、私はぐつたりと全身の力が抜けてしまつて、彼のおちんちんも、私の中から抜けてしまふ。

「気持ち良かったですか。」

「はい、恥ずかしいくらいに凄く感じちゃいました。」

「それは良かったですね。それでは診察を続けます。」

もう、気持ち良くなってしまつたから、これでプレイはおしまいかなんて思っていたのだけど、考えてみれば、彼の方はまだ気持ち良くなって、ピョつて出たわけじゃないから、続きをしたいよね。

もう一度、私の中で続きをやつて、気持ち良くなつてくれても良いんだけどね。そうすれば、私ももう一回、素敵なお気分になれるし。

でも、彼はまだ、お医者さんごっこって言ってる。

これ以上、何をしてもいいのかな。

「まだ、お医者さんごっこをするの。」

「次が最後の診察です。うつ伏せになつて、お尻を上げてください。」

「バックスタイルね。もう一回、挿れてくれるの。」

「入れてあげますよ。診察の後にね。」

「診察つて、今度は何をしてもいい。」

「次は肛門科の診察です。」

「やだ、お尻の穴を診るの。指とか道具とか入れたら、汚れちゃうわよ。」

「大丈夫。診察前の処置もきちんとしていますから。」

お尻の穴も、さつきウオシレットで洗つてあるけど、そんなところも、さつきのおまんこと同じように診るつもりなのかな。

それは、かなり恥ずかしい。

ところが、彼はまたバッグの中から、別の小道具を取り出した。

「これが何か、知っていますか。」

ちよつと待つて。

そのピンクのかわいいお薬には、見覚えがある。

「べつべつというもので、べつべつという使い方をするか、解りますよね。」

「それは…かんちよつでしよう。それを私にするの。」

子供の頃に、母から浣腸されたことはある。

中学頃の同級生が持つてるのも、見せてもらったこともある。

その同級生は、数人で便秘の話題になった時に、「私、これ持つてるんだよ。」って言って、イチジク型のそれを見せてくれた。

「使ってみる？」って言われたけど、そこに居た皆が首を横に振った。

お尻の穴からお薬を入れるなんて、なんだか恥ずかしいし、ちよつとエッチな雰囲気もある。

それに、浣腸を使えばウンチが出ちやうことも知ってるから、ウンチをしたことも、そこに居る同級生にバレちゃう。

「そうです。肛門の診察の前に、中をきれいにしておかないとね。」

それに、肛門科での痔などの診察では、排泄する時に、肛門の脱肛状態なども確認しなければなりません。」

それって、私が浣腸されてウンチするだけじゃなくて、その出る瞬間のお尻の穴を観てるってことなの。

浣腸されたら、昨日から溜まっているウンチが、いっぱい出ちやうんだらうし、音や匂いも一緒に出るだらうし、普通にトイレに行つてするよりも、何十倍も何百倍も恥ずかしい。

「うんちするところまで観られちやうの。そんなのヤダ。恥ずかしい。」

「医師の言うことには、全て従うって約束しただらう。」

医師の診察なんだからね。恥ずかしくても必要なんだよ。

それに、今日も便が出てないんだらう。

きちんと出さないと、便秘が酷くなつちやうし、肛門が切れて痔になつちやう可能性もあるよ。

それをしつかり確かめてあげるからね。」

彼にそう言われてしまうと、逆らえない雰囲気になつてしまふ。

そもそも、賭けを言い出したのは私だし、何でも言う事を聞くつて言ったのも私だ。

それに、彼が言うように、便秘を放つておくのも、後が大変になつてしまふのも事実だ。

浣腸を使う事は無いけど、便秘薬のお世話になったり、トイレで硬くて大きいウンチを産みだすのに苦労したりするように、なってしまう。

まだ、切れて出血したことはないけど、切れそうな感覚になって焦ったことはある。

彼は、私のおまんこから流れてるネバネバした液を、お尻の穴に塗り込むようにして、お尻の穴を弄っている。気持ち良いってわけじゃないけど、なんだかムズムズしてしまう。

しばらくすると指が離れて、浣腸の先っぽが入ってくる。

プラスチックのストローのようで、指よりも細いので、つかえることもなくスルツと押し込まれてしまう。

「ちよつと冷たいかもしれませんが、お薬を入れますね。」

彼がそい言った後で、お腹の中に何かの流れ込んでくるような感じがした。

「あつ、何か入ってくる。変な感じ。」

痛いわけじゃないし、すぐにトイレに行きたくなるわけでもないけど、お尻からお腹の中に何か入れられるなんて、子供の頃の浣腸の経験しかないから、何だか変な感じだ。

入れ終わって空になった浣腸を抜かれた後は、また、彼の指は、私のクリトリスに伸びる。

「ああ、また気持ち良くなっちゃう。」

「じゃあ、また気持ち良い診察をしましょう。」

お薬が効くまでしばらく時間がかかりますから、それまで、先ほどの膣圧測定の続きです。」

そう言つて、そのままの姿勢で、バックからおちんちんがおまんこに入ってくる。

お尻には浣腸されているのに、おまんこにはおちんちんが入ってるなんて、前も後ろも同時に悪戯されておかしな気分だ。

「浣腸が効いてきて、便意が強くなっても、ギリギリまで我慢しなきゃダメですよ。」

限界になってももう無理つてなったら、排泄できるようにしますから、それまではこのままで待っていきましょうね。」

「限界になったら、トイレに行かせてくれるの。」

「いや、排泄時の肛門の動きを観なければいけません。」

「この洋式トイレでは、肛門からの排泄が見えませんが、お風呂場でしゃがんで、洗面器にします。」

「ええ、そんなのヤダ。」

「うんちするところまで観られるなんて、恥ずかしいよ。」

「一応、もう一度抵抗してみるが、彼は許してくれそうもない。」

本当に、私のお尻からウンチが出る瞬間を、観るつもりなんだ。

「これは診察ですからね。」

医師の指示には、どんなことでも従ってもらいますよ。」

そう言いながらも、二人の腰はシンクロしたように動き続ける。

さつきは、私一人が夢中になつて動いていたけど、今度は彼も、気持ち良くなろうとして、自分からおちんちんを入れたり出したりしてくれる。

もちろん、そうされると私も気持ち良くなってくる。

「ねえ、今までに浣腸したことつてあるの。」

それは、お医者さんとして問診してるのかな。

なんだか、口調が変わつてお医者さんぽくないみたいだよ。

「小学生の頃ね。便秘でお腹が痛くなつて、お母さんにかんちょうされたの。」

ベッドでスカートとパンツを脱がされて、イチジクかんちょうを入れられちゃった。



まだ二年生くらいだったから、たぶん子供用ね。」

「それで、トイレに行つてウンチしたのかな。」

「そう、ベッドでお尻の穴を押さえられたまままで我慢させられて、もう無理つて泣きだしそうになって、トイレに連れて行つてもらつたの。」

「トイレに着いたら、すぐに出ちやつたのかな。」

「そう、しゃがみ込むのと同じくらいにね。」

それでね、その頃住んでたお家は、和式のトイレだったの。

入つてそのまま、ドアの方にお尻を向けてするタイプの。

だから、お母さんがお尻の穴を押さえたままで、一緒にトイレまで来てくれて、ドアを開けたまま、指を離すと

同時くらいにジャーつて出ちやつたの。」

ついつい、そんな昔話をしてしまった。

「なんだ、もう僕が診るよりもずっと前に、そんな経験をしてるんだ。」

「だって、小学生の頃だよ。してくれたのはお母さんだったし。」

「今夜も、それと同じようにしてあげるよ。」

「もう、大人になつて、そんな事されるなんて、凄く恥ずかしい。」

どうしても、出すのを観るの。」

「そう。君が恥ずかしがる姿が素敵だからね。」

羞恥の極限まで味合わせてみたいんだ。」

彼のおちんちんを出し入れされながら、そんな話をしてるうちに、だんだん浣腸が効いてきたみたい。

お腹の中がキョつて痛くなつて、ウンチをしたい感じがして来た。

おまんこは、出し入れされて気持ち良いけど、ウンチしたい感じと合わさつて、なんだか変な感覚になってくる。

腰の動きも、いつもの気持ち良い時の動きと、ウンチを我慢してお尻をムズムズさせる動きが一緒になって、変な感じだ。



漏れないようにお尻の穴を絞めると、おまんこにも力が入って、彼のおちんちんを強く締め付けてる感覚が伝わってくる。

締めが良いのは、男の人に見れば気持ち良いことなんだろうから、彼はいつもより気持ち良く感じてるのかな。

「浣腸しながら挿入すると、こんなになるんだね。」

「とっても気持ち良いよ。」

「私も、自分のアソコが壊れそうなくらい気持ち良いの。」

うんちを我慢しながら、あそこに入れられてるのって、お腹は苦しいけど、アブノーマルな気分です、とっても興奮しちゃう。

それに、あなたのモノもいつもより大きくて硬いような気がする。」

「このままで、君の中に出しちゃいそうだけど。」

「出しても良いわよ。今日は大丈夫な日だから。」

そういう日だから、こんなホテルに来てるんだもんね。」

おちんちんの動きはいつそう激しくなり、彼がそろそろ逝っちゃいそうな雰囲気解る。

彼は、いつもの時のように、入れたままでクリトリスを弄ったり、乳首をつまんだりして、私が気持ち良くなるようにしてくれている。

いつもと同じように、とっても気持ち良いんだけどね。

お腹の中は、嵐がだんだん強くなるように、ウンチしたい感じが強くなってくる。

おまんこは気持ち良いけど、そろそろ危ないかな。

まさか、ベッドの上でウンチを漏らすわけにはいかないしね。

「気持ち良いけど、、、もう漏れそう。」

彼にそう言うと、途中だけど、おちんちんが抜かれる。

私ももうちよつとで逝きそうだったのに残念だけど、漏れそうな状態が我慢できないし、ここで逝っちゃったら、そのまま力が抜けて、お尻の穴から、中身が出てきちゃうのも、予想が出来る。

彼は、私のお尻の穴を指で押さえながら、私の体を支えて、バスルームの方に連れて行ってくれる。
子供の頃にお母さんに浣腸された時と同じだ。

でも、連れて行かれたのは、トイレではなくて浴室の方だ。

そして、そこでしゃがまされて、お尻の下には洗面器が置かれる。

「もうダメ。もうすぐ漏れる。本当にここですの。」

「そうだよ。観ていてあげるから、僕の目の前で出してごらん。」

彼は、床に横になるような格好で、私のお尻を見つめている。

ここで我慢してる力を抜いたら、本当に彼の目の前で、お尻の穴からウンチが出るのを観られてしまう。

「ああつ、恥ずかしい。どうしても観るの。」

「そうだね、今思いついたんだけど、僕の目の前で出すのと、僕に跨つて、入れられたままで出すのと、どっちが良いかな。」

「そんなの、どっちも恥ずかしくて嫌。」

「どちらかを選ばんだよ。君の選んだ方法で出させてあげるから。」

どうせ、ここでウンチを漏らすことになるなら、お尻の穴が開いて中身が噴き出すのを、彼に観られるのは、恥ずかしくて嫌だ。

「じゃあ、入れたままの方が良いかな。」

どうせ、ここで出すんなら、観ていられるよりは、まだましだわ。」

「じゃあ、僕に抱きつくような体勢で、もういちどこれをおそこに入れてごらん。」

彼はお風呂場のの椅子に腰かけて、私が上からその上に跨る。

もちろん彼の股間からは、硬くて大きいおちんちんがそり立っているから、私は、自分からおまんこをおちんちんにかぶせていく。

もう、おまんこはヌルヌルに湿っているから、何の抵抗も無く、ドッキングは成功し、さっきの快感の続きが蘇ってくる。

おまんこは刺し貫かれているけど、彼の太腿はちょうど拡かかれていて、その下に洗面器が置かれているから、私はまるで便器かおまるに跨っているような姿勢だ。

もちろん、正面から彼に抱きしめられ、キスされたり、おっぱいを吸われたり、いつもの行為も続けている。

このまま最高になっちゃっても良いのかな。

もうさっきからの刺激で、すぐにでも逝ってしまいそう。

ウンチの我慢ももう限界だ。

逝くのと漏らすのと、同時に二つの絶頂を迎えそうだ。

「ああっ、逝く。出る。」

私の体全体が、痙攣したみたいに震える。

彼のおちんちんを、きつく締め付けながら、私は逝ってしまふ。

そして、その痙攣のような震えの後は、体中の力が抜けてしまうのが、自分で解る。

ウンチが出るのを我慢していたお尻の穴を閉める力も抜けて、中身が噴き出してくるけど、もう力も入らないし、自分ではどうしようもない。

激しい音もするし、ウンチの匂いも漂ってきて、とんでも恥ずかしいけど、彼の上で、彼に抱きしめられているだけ

でも、もう自分では動くことも出来ない。

ウンチがお尻の穴を通り抜けるたびに、穴が開いたり閉じたりして、もちろん、おまんこも同時に同じように緩んだり締ったりしてるんだらう。

彼のおちんちんが、それを感じて。ピクピクと動くのが解る。

ウンチが通り過ぎる感触も、おちんちんで感じてるのかな。

彼も、とつても気持ちよさそうで、もうすぐにも。出て出そうだ。

そう思った途端に、彼の全身の筋肉も緊張して、おちんちんから気持ち良い汁が、私の体の中に噴き出すのを感じた。

彼も、私と同じように逝ってしまったのだ。

しばらくは、そのままの抱き合った体勢で、お互いの息使いが落ち着くまで何も出来なかった。

私のお尻から流れ出すものも途切れて、お尻の穴がぼっかり開いた感じも、元に戻ってくる。

彼のおちんちんは、相変わらず私の中に入っているけど、ちよつと硬さも大きさも普通に戻って来たような気がする。

彼は優しくキスをしてくれて、私を抱きかかえて立たせてくれる。

そして、浴槽に入らせて、そこに座らせる。

もちろん。まだお湯も張ってなくて、排水口に蓋もしてないけどね。

膝を立てて、浴槽にもたれかかっていると、もう一つの排泄感も、じわじわと起こってくる。

「おしっこも出さなう。」

「いいよ、そのままでも。シャワーで流してあげるから。」

彼の言うとおりに、そのままの格好でおしっこもしてしまふ。

膝を立てて、脚もちよつと開いているから、おまんこの周りも彼に観られてるだらう。クリトリスの下の、さっき舐め

られた穴から、おしっこが噴き出す様子を、じつくりと観られてしまう。

恥ずかしいとは思うけど、もうウンチも観られてるし、気にしないで出してしまった。

浴槽の底に、黄色いおしっこが流れ、排水口に流れる。

彼は、てきぱきと動き回り、トイレットペーパーで私のお尻の穴も拭いてくれ、洗面器の中の私のウンチと一緒に、トイレに流してくる。

まさか、ウンチをした後のお尻の穴を拭くところまで、彼にやつてもらうことになるなんて、このラブホに入るまでは考えもしなかったけど、私の体はもうぐったりしたままで、彼のなすがまま、全てを委ねてしまふ。

彼は私の体にシャワーをかけ、浴槽の底のおしっこと一緒に、私の体の汗や、おまんこから流れだしてくる彼の精液もきれいに流してくれる。

浴室の床に点々と飛び散っている私のウンチの飛沫も、シャワーで排水口の方に流してくれ、これで私のウンチの名残りは、微かに漂っている臭いだけになる。

その後、もう一度シャワーを出して、ボディソープで私の全身を綺麗に洗ってくれる。

おっぱい、おまんこ、お尻の穴と、恥ずかしい部分から、爪先まで洗ってくれるけど、顔と髪はいつも

「水をかけないで。」ってお願いして、自分でやつてるから、今日も覚えていて、そこだけは触らないでいてくれる。

彼の指先が、おまんこやお尻の穴にタッチする。

指先が、その中に入っ行って行こうか、止めておこうかと、ためらっているような微妙なタッチだ。

もつとももらいたいような、これ以上は怖いような、複雑な気分だ。

彼は、自分の体もしっかり洗う。

おちんちんもきちんとして洗ってるけど、そんなにゴシゴシ洗って、痛くないのかな。

ちよつとしょんぼりしてるけど、私が触ったらまた元気になりそうだ。

その後、私の体をバスタオルで拭いてくれ、自分の体も拭いて二人でベッドに行つて、並んで横になる。

「どうかな、お医者さんごうこの感想は。」

「とっても恥ずかしかったけど、凄く興奮して感じちゃった。」

「続きをもつとやつても良いんだけどね。」

「まだ、続けるの。次は何をするつもりなの。」

「そりゃあ、お尻の穴の中が綺麗になったんだから、指を入れたり、中を覗いたり、あれこれとできるよ。膣圧測定のように、肛門の締付強度測定でもね。」

「それつて、あなたのアレをお尻の穴に入れるつてこと。」

「アナルセックスつていうのをしてみたいのね。」

「もしも、君がして良いつて言ってくれればね。」

「今日はもう駄目。そんな元気は残つてないわ。」

それにあなただつて、私の中に出しちゃったでしょう。」

それで、今日は終わりにして。」

「まあ、それでも良いかな。」

今日は、つてことは、この次もあるつてことかな。」

「そうね。こんなこと、毎回するような遊びじゃないから。」

そのうちに、また今日みたいな快感を味わつてみたくなつたらね。」

「そんなに特別な快感だったのかな。」

「だつて、かんちようされてウンチをするんだよ。」

それもあなたに抱かれながら。」

普通の人は、そんな経験、一生に一度も無いでしょう。」

「そうだね、セックスしながらの排泄なんて、AVくらいだろうね。」

僕も、入つてるすぐ隣の、激しい流れが、あそこに伝わつてきて、とっても気持ち良かったよ。」

「私も、自分のがギュってと締って、あなたがピクピクするのをあそこで感じたわ。二人とも特別な快感だったのね。」

「また、流腸させてくれるかな。今度は、入れたままじゃなくて、僕の目の前で出して見せて欲しいな。」
「やだ、恥ずかしい。」

そんな話をしながらも、目蓋が重くなり、話もどぎれどぎれになり、二人とも眠りに落ちていった。

